

シユガーロードが日本遺産に

文化庁が認定



JAPAN HERITAGE
日本遺産

ぶための大動脈として栄えた。

長崎街道沿線では砂糖や外国由来の菓子が多く流入し、菓子職人が長崎へ外国の菓子の製法を直接学びに行ったり、菓子作りの技法などを入手しやすかったりしたため、全国的にも有名なお菓子が生まれた。

肥沃な穀倉地帯が広がる佐賀市では、小麦粉などを用いた丸ぼうろなどの菓子作りが、清らかな水や良質な小豆に恵まれた小城市では羊羹作りが盛んになった。茶道文化が発達していたことから、お茶と共に楽しむ菓子として羊羹が受け入れられ、浸透していった。

明治初期から炭鉱で栄えた筑豊（福岡県）にも佐賀市の菓子店が進出し、千鳥饅頭を販売した。甘い菓子は肉休労働が続く炭鉱で働く人たちのエネルギー源として好まれたという。こうしたことから、長崎街道は後に「シユガーロード」とも呼ばれるようになった。

シユガーロードの歴史と文化を生か

江 戸時代、海外の文明の品々が長崎に集まった。その砂糖は食文化に革命を起こし、やがて砂糖を生かした文化が長崎を起点とした街道沿いに広がっていった。「シユガーロード」の誕生だ。6月、佐賀市を含む佐賀、長崎、福岡の3県にまたがる「砂糖文化を伝えた長崎街道シユガーロード」が文化庁の「日本遺産」に、認定された。個性豊かな菓子を生かした地域おこしへの期待が膨らんでいる。

日本遺産は、地域の文化財群を通じて文化・伝統を語るストーリーを、文化庁が「日本遺産」として認定し、国内外に発信することにより、自立的な地域の活性化を図ることを目的としている。

江戸時代、長崎街道は九州各地の大名たちの参勤交代、商人や旅人、オランダ商館長の江戸参府、ゾウやラクダなどの珍獣までさまざまな人と物が行き交い、海外からの品々や技術、文化を全国へ運

銘菓を生かして地域活性化を

佐賀市柳町地区

佐賀県関係の構成文化財

- ①嬉野市塩田津（嬉野市）
- ②逸口香（嬉野市）
- ③金華糖（嬉野市）
- ④ふなんごい（嬉野市）
- ⑤砂糖酒（嬉野市）
- ⑥牛津宿（小城市）
- ⑦旧砂糖貯蔵庫及び製造道具等（村岡総本舗羊羹資料館及び展示資料）（小城市）
- ⑧村岡総本舗小城本店（小城市）
- ⑨小城羊羹（小城市）
- ⑩柳町地区（佐賀市）
- ⑪丸ぼうろ（佐賀市）
- ⑫ケシアド（佐賀市）
- ⑬寿賀台（佐賀市）
- ⑭菓子仕方控覚（鶴屋文書）（佐賀市）
- ⑮享和三年御菓子覚書（鶴屋文書）（佐賀市）
- ⑯御菓子覚書（鶴屋文書）（佐賀市）
- ⑰諸願書御菓子日記帳（鶴屋文書）（佐賀市）
- ⑱菓子製造法帳（北島文書）（佐賀市）

長崎街道とは

江戸時代に整備された脇街道の一つで、豊肥前国長崎（長崎県長崎市）をつなぐ全長57里（228キ）。西洋や中国からもたらされた珍奇な文物（織物や書籍、動物など）を日本各地へ運ぶ、九州の大動脈だった。



銘菓めぐりの旅



佐賀が誇る銘菓を手軽に楽しんでもらおうという、街歩き企画「ぶらり佐賀！銘菓めぐりの旅」も展開中だ。

「佐賀銘菓を楽しみながら、佐賀市の街並みをぶらり旅」がキャッチコピー。佐賀市の町なかを南北に貫くシンボルロード（中央大通り）沿いにある、佐賀銘菓の老舗、4店舗のこだわり銘菓（合計500円以上）を食べながら、佐賀市の街並みをぶらりとめぐる。参加店舗はシンボルロードの北側から、村岡屋（本店）、八頭司伝吉本舗（佐賀唐人町店）、

村岡総本舗（唐人町店）、北島（白山本店）の4店だ。チケット500円（税込）を、JR佐賀駅構内の佐賀市観光案内所やコムボックス佐賀駅前、新しくオープンした観光・県産品情報発信拠点「SAGAMADO（サガマド）」、エスプラッツ2階（佐賀市白山2丁目）の佐賀市観光協会で購入する。期間は21年3月末まで。問い合わせは佐賀市観光協会、電話0952（37）7489。

千鳥饅頭も佐賀市にルーツ

福岡の代表的銘菓として知られる「千鳥饅頭」も実は佐賀市発だ。佐賀市にあった菓子店「松月堂」が明治初期から炭鉱で栄えた筑豊（福岡県）に進出し、千鳥屋を開店。千鳥饅頭を販売した。福岡県飯塚市を代表するお菓子として、今回のシユガーロードを構成する文化財の一つに数えられている。



ぶらり佐賀！

銘菓めぐりの旅Map



「銘菓めぐりの旅」チケットを10名様にP140をご覧ください

プレゼント

日本遺産は15年度に始まり、今年度までの認定件数は合計104件。佐賀県関係の認定は16年度の「日本磁器のふるさと肥前シユガザラ（ひつかりざら）のやきもの散歩」以来、2例目になる。



文豪も愛した羊羹

夏 目漱石は「余は凡ての菓子の中で尤も羊羹が好だ」と「草枕」に記す。「草枕」は冒頭の「山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される」で有名だが、羊羹の場面も面白い。羊羹は「吾輩は猫である」にも登場させている。

正岡子規が死の直前まで書き続けた日記「仰臥漫録」には、日々の献立が克明に記されている。中でも子規が愛したのは、おやつ。菓子パン、ブドウ、塩せんべい、牛乳ココア入りなどとともに、羊羹も登場する。食べることは病と闘う子規に大きな楽しみと生きる力をもたらした。

大隈重信記念館蔵



宰相・大隈重信が愛した銘菓「丸ぼろ」

明 治・大正時代に首相を2度務め、早稲田大学の創設者として有名な大隈重信（1838〜1922年）は銘菓「丸ぼろ」を愛した。鶴屋（佐賀市西魚町）によると、明治29（1896）年、大隈が母の一周忌で帰郷し同

店に立ち寄った。茶と丸ぼろを出すと、大隈は「他に類例少なき風味」と大いに気に入り「世に広く紹介すべきだと勧めた」という。その後、11代目善吉が職人を伴って上京し、東京・早稲田の大隈邸で丸ぼろを焼いている。



著書「肥前の菓子」を手に、「村岡総本舗羊羹資料館」の前に立つ村岡安廣社長＝小城市小城町

小 城羊羹を製造販売する老舗「村岡総本舗」（小城市）の4代目村岡安廣社長（72）は、小城には羊羹の店が多くあることから「日本一の羊羹タウン、小城」ともいわれるが全国的にはほとんど知られていない。認定を機にもっと情報発信したい」と日本遺産認定を喜んでい

「村岡総本舗羊羹資料館」は、砂糖貯蔵庫として建てられ、現在には羊羹の原料や製造道具などの資料展示をしている。村岡さんはシュガーロードに関する「肥前の菓子 シュガーロード 長崎街道を行く」(佐賀新聞社刊、2006年)を著すなど小城羊羹PRの先頭に立ち続けてきており、「小城ならではの伝統製法羊羹のみずみずしい、おいしさを伝えたい」と決意を新たにしている。

羊羹

Yokan

丸ぼろ

Maruboto

「丸ぼろや羊羹がずっと続いてきたのは、生活に密着し、県民のみなさんに愛し育ててもらってきたから。本当にありがたいです」と感謝し、「伝統を守りながら、時代に合わせた新しい商品も作っていきたい」と話している。



古文書「鶴屋文書」を開きながら認定の喜びを語る堤光昌社長＝佐賀市西魚町の鶴屋本店

1 639年創業の鶴屋（佐賀市西魚町）の14代目、堤光昌社長（72）は先祖が残してくれた、菓子の製造法などが書かれた古文書「鶴屋文書」（4冊）を手に、喜びをかみしめている。

同店の丸ぼろは、江戸時代の天和年間（1681〜1684年）に2代目太兵衛が長崎の出島でオランダ人からポルトガルの製法を学び、佐賀に持ち帰ったのが起源。「古文書には鍋島のお殿様が、息子の嫁の里へのお土産にするから」と注文した内容なども事細かに書いてある」という。



「北島」白山本店の前に立つ香月道生社長。店舗外観は丸ぼろのふろさとポルトガルをイメージした色とデザインになっている。店舗北側（写真左）を通るアーケードが長崎街道＝佐賀市白山

明

治時代に北島の8代目によって書かれた「菓子製造法帳（北島文書）」が構成文化財の一つになっている「北島」。香月道生社長（60）は明治維新で人々の暮らしが洋風化し、日本人が卵を食べるようになっていく歴史をひも解きながら「明治の初めに8代目・9代目の父が苦心して改良に取り組み、現在の「北島」の丸ぼろを完成させた。長崎街道が日本の菓子作りに革新をもたらし、さらに三重津海軍所跡などの世界遺産にも大きな役割を果たした」と今回の日本遺産認定を評価した。今後に向けて「菓子屋として日本人の口に合うお菓子を作り続けたい」と話している。

関

係事業者の皆さんに協力してもらいながら、旧古賀銀行（佐賀市歴史民俗館）や佐賀パルティンミュージアムなどの観光施設で丸ぼろの実演販売や伝統菓子・パネルの展示などを行い、シュガーロードにまつわる菓子文化をPRしてきました。これからもさまざまな取り組みを通して地域を盛り上げ、シュガーロードの魅力伝えていきたいと思えます。



佐賀市観光振興課 山口真那美さん



シュガーロード

長崎街道シュガーロード

<http://sugar-road.net>